

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 疏 蒲 剣

論文題目 現代日本語における程度副詞の研究

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学教授	玉岡賀津雄
委 員	名古屋大学准教授	鷺見幸美

本論文は現代日本語における程度副詞について考察したものである。程度副詞とは (1) の「とても」や「かなり」のように文中の形容詞的成分を限定する表現である。

(1) 太郎は {とても／かなり} 背が高い。

しかし、(2) と (3) では、「かなり」は使用できるのに対し、「とても」は使用できない。すなわち、(2) では「かなり」は太郎が飲んだお酒の量を限定し、その量が多いことを表しているのに対し、(3) では「かなり」は太郎と次郎の身長差を限定し、その差が大きいことを表している。

(2) 太郎は {*とても／かなり} お酒を飲んだ。

(cf. 太郎は {とても／かなり} たくさんお酒を飲んだ。)

(3) 太郎は次郎より {*とても／かなり} 背が高い。

このように、同じ程度副詞といっても程度の限定の仕方に様々な違いが見られる。これらの違いについて本研究では文の比較基準の違いによると考え、比較の対象と比較の基準との関係の違いにより、程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の 11 種類に分類した。これにより、先行研究で言及されている被修飾成分の意味特徴や程度副詞が現れる構文の特徴などを比較という統一した視点から説明できることを指摘している。以下、本論文の概要と評価について述べる。

[本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で 6 章からなる。

「第 1 章 序論」では、本研究の目的を説明した上で、程度副詞の境界、程度副詞同士の違い、これまでの程度副詞の分類について論じ、本研究の程度副詞の分類を提示している。

「第 2 章 先行研究」では、副詞の定義、程度副詞の境界、程度副詞の下位類について先行研究を概観し、本研究の程度副詞の分類基準を設定している。程度副詞は従来様々な観点から分類されており、その分類基準には大きく分けて 3 つのタイプがある。1 つ目は程度副詞の被修飾成分の性質によって程度副詞を分類するタイプである。森山 (1985)、仁田 (2002)、北原 (2013) は、程度副詞の被修飾成分について、「(お酒に) 強い」のように属性を表す形容詞的なものと、「(お酒を) 飲んだ」のように動作を表す動詞的なものに分け、形容詞的なものを修飾する程度副詞は程度を限定し、動詞的なものを修飾する程度副詞は量を限定するとして、「とても」のような程度しか限定しない程度副詞と、「かなり」のような程度も量も限定できる程度副詞とを区別している。2 つ目は程度副詞が現れる構文の特徴によって程度副詞を分類するタイプである。渡辺 (1990) は比較のヨリ格がある文を比較構文、比較のヨリ格がない文を計量構文として、比較構文に現れる程度副詞を「比較系」、比較構文に現れない程度副詞を「発見系」に分類している。3 つ目は上の 2 つのタイプの分類方法を融合させたタイプである。中山 (1996) は程度副詞がもつ程度の基準により、程度副詞を、「絶対程度副詞」、「極限的程度副詞」、「関係的程度副詞」、「量的程度副詞」に分けている。また、田和 (2011) は程度副詞を「程度系」、「量系」、「比較系」に分けている。これらの研究を受け、本研究では 3 つ目のタイプの分類基準を用いて、「比較基準」という視点から考察することを主張している。

「第 3 章 比較基準について」では、程度副詞が現れる文における「比較」の違いについて論じ、「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全

体基準」の 8 つの比較基準が存在することを指摘している。「他者基準」とは比較対象以外の事物を基準として、比較のヨリ格などで明示されるものである。「範囲基準」とは比較対象が属する集合を基準として、「～で」という形で明示されるものである。「時空基準」とは相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準として、文中には明示されなくてもよいものである。「過去基準」とは過去の比較対象自身を基準として、文中には明示されなくてもよいものである。「平均基準」とは比較対象が属する集合の平均値を基準として、文中には明示されないものである。「感覚基準」とは話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準として、文中には明示されないものである。「計量基準」とは動作に関わる量を測るために単位量を基準として、文中には明示されないものである。「全体基準」とは量の全体すなわち 100%を基準として、文中には明示されないものである。また、この 8 つの比較基準は、先行文脈あるいは文中に現れるかどうかによって、明示的な比較（他者基準、範囲基準）、含意的な比較（時空基準、過去基準）、潜在的な比較（平均基準、感覚基準、計量基準、全体基準）の 3 種類に分けられることを指摘している。

「第 4 章 程度副詞の分類」では、前章で論じた 8 つの比較基準を用いて程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の 11 種類に分類し、各種類の程度副詞の意味特徴と構文の特徴について比較基準の観点から論じている。その結果、11 種類の程度副詞について次のような特徴のあることを明らかにした。

「もっと」類：他者基準の文にしか用いられず、同じ属性を有する 2 つの事物を比較し、一方が他方より程度が高いということを表す。

「最も」類：範囲基準の文にしか用いられず、比較対象が特定の範囲内において何らかの程度が 1 位であるということを表す。

「とても」類：平均基準の文と感覚基準の文に用いられ、比較差が「通常程度」より大きいということを表す。

「極めて」類：平均基準の文にしか用いられず、比較差が「心理的な極限」に近いということを表す。

「ほとんど」類：全体基準の文にしか用いられず、当該の量が全体量に近いということを表す。

「完全に」類：全体基準の文にしか用いられず、当該の量が全体量に到達しているということを表す。

「少しも」類：全体基準の文にしか用いられず、当該の量がゼロであることを表す。

「ずっと」類：他者基準の文、時空基準の文、過去基準の文に用いられ、比較差が「通常程度」より大きいということを表す。

「あまり」類：平均基準の文、感覚基準の文、計量基準の文、過去基準の文に用いられ、比較差が「予想程度」より小さいということを表す。

「かなり」類：他者基準の文、時空基準の文、過去基準の文、平均基準の文、感覚基準の文、計量基準の文に用いられ、比較差が「通常程度」より大きいということを表す。

「少し」類：他者基準の文、時空基準の文、過去基準の文、平均基準の文、感覚基準の文、計量基準の文に用いられ、比較差が「通常程度」より小さいということを表す。

「第 5 章 程度副詞の類義分析」では、似た意味を持つ「ずっと」類と「もっと」類、「とても」類と「極めて」類、「かなり」類と「少し」類、「少し」類と「あまり」類を取り上げて、その意味

と構文の違いを明確にすることによって、比較基準による程度副詞の分類の合理性を検証し、程度副詞の意味の複雑さについて述べ、程度には「評価型」、「達成型」、「配列型」の3種類が存在することを論じている。

「第6章 終わりに」では、本研究の分析結果をまとめ、残された課題について論じている。今後の課題としては、①各程度副詞の被修飾成分について、実際のデータを基に調査を行い、記述・分析を行う必要がある、②「なかなか」、「結構」など、一部の程度副詞についてその意味の特徴をさらに考察する必要がある、③比較基準同士の関係について追究する必要があることを指摘している。本研究で提示した8つの比較基準は、これらの研究課題を遂行するための有効な分析手段となっている。

[本論文の評価]

本論文は従来の研究で用いられていた複数の視点を比較という枠組みに収め、程度副詞が現れる文に存在する8つの比較基準を設定し、比較対象と比較基準との関係を綿密に分析することによって、11種類の程度副詞の違いを説明した点で優れた論文である。とりわけ、以下の各点において審査委員から高く評価された。

- 1) 研究のデザインが綿密で、極めて論理的に論証されている。
- 2) 先行研究について十分な検討が加えられ、これまでの研究の成果と問題点を明確に指摘したうえで、研究史上意義のある研究課題が提示されている。
- 3) 8つの比較基準を設定することにより、11種類の程度副詞の違いが明確に説明されている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

- 1) 8つの比較基準のうち、「時空基準」と「過去基準」は「他者基準」の下位類と考えられる。基準間の相互関係をもう少し詳しく論じるとよい。
- 2) 「全部」を程度副詞と考えない理由など、程度副詞とその周辺領域との違いについて、もう少し詳しく論じたほうがよい。
- 3) 程度副詞の変化量を表す図の曲線部が不明瞭である。

このように本論文には、不十分と思われる箇所も見られる。しかし、本研究で行った研究は先行研究の指摘を十分に超えるものであり、日本語研究において重要な位置を占めるものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。